

<海援隊 大坂詰所(薩万跡)について>

数年前から主に大阪市立中央図書館に通い、さまざまな史料等を収集し、また大坂史跡を研究する諸先生や図書館員の方々にご協力いただきながら研究してまいりました。(大坂での勝 海舟寓居先である「専稱寺跡」も同様でした)結論から申し上げますと、まだ場所の確定ができていませんが、ヒントとなる史料を紹介いたします。文中にポイントとなる箇所を太字と下線で示しました。

史料1 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P554～556を抜粋
「実話雑誌」(非凡閣発行、昭和六年四月創刊、月刊誌)九月号
安岡重雄(海援隊士安岡金馬の子)著

私は母から、薩摩屋のおりせといふ名を聞いて居た、そのおりせについて、お良さんはこんな話をした。「世間には余り知られて居ないけれども、お登世さんよりもおりせさんの方が、どれ程勤王の人達を助けたか知れませんが、寺田屋のやうに目に立つ事件が起こらなかつたから、自然世間の注意を惹かなかつたけれども、おりせさんは侠客肌の女で、熱心な勤王最良でした。そのおりせさんに一番世話を焼かせたのは、伊達要之助(陸奥宗光)さんでしたよ。」

このおりせは、良人の万吉と共に、大阪にある薩摩の花屋敷のお出入で、屋敷の門前に、薩摩屋といふ屋号で、人足差入れの稼業を営んで居た。

同志の人々は、その頭文字を取って「薩万」と呼んだ。

坂本や、中岡や、其他海陸両援隊の人々は、京都で伏見の寺田屋、大阪でこの薩万を隠れ家にして居た、おりせはお登世に一層輪をかけた男勝りで、度胸もあつたし。惻巧で、勝気で、浪人の世話は、一切おりせが引受けてやつた。かうした女の亭主にあり勝ちな、万吉も好人物(おひとよし)の無口の男だつた。

稼業が人足の差入れだから、薩万の二階にはいつも若い奴がごろついてゐた。

足繁く他人が出入をしても、怪しまれる憂ひがなかつたので、浪人達は、こゝを屈強の隠れ場所にした。伊達要之助は、幕府方に逐はれて、この薩万に逃込んだ。

詮議が厳しい、岡つ引の鶺鴒の目、鷹の目である。薩万の周囲を、夜となく、昼となく、うさん臭い男が徘徊する。片時も油断は出来ないの、おりせは要之助を押入の中に隠して三度の食事を自分が運んだ。着の身着の儘、垢に塗れ、虱が湧いて、押入の戸を開けると強烈な臭気が鼻を衝く、かうした押入の生活が、月余に亘ると、要之助は退屈でたまらなくなつた。陽の光が見たい、晴れた空を仰ぎ度い、さういふ衝動が、全身をうづうづさせた。

「え、どうなるものか！」と捨鉢になつて、或日こつそり押入の中から這ひ出すと、窓を開けて、てすりの外へ首を出した。

そこは裏二階の、下が川で、どす黒く濁つた水が、ゆるい流れを見せて大川につづいて居た。

その時である、要之助は挙動不審の男を見た。男は中年の紙屑買ひであつたが、河岸に佇んで、二階を見上げた瞳に、要之助の魂をわななかせ鋭い光があつた。「失策(しま)つた」と思った。要之助はすぐ首を引いた。おりせが夜の食事を運んで来た。要之助の話を知ると、おりせは忽ち顔の色を変へた。

「あの紙屑買ひなら、私も不思議な奴だと思つて居ました。毎日のやうにやつて来て、薄気味の悪い眼付で奥を覗くのです。もうかうしては居られません、今晚すぐ船でお逃げなさい」

「飛んだことをしてしまつた。つい明るい世界が見たくなつたものだから！」夜更けて要之助は、裏河岸から、こつそり小舟に乗移つた、船頭は薩万腹心の若い男だつた。

「一方ならぬ世話になつた、忝(かたじ)けない」「氣をつけて往らっしゃいよ、では、お達者で！」見送るおりせの眼に、熱い雫があつた。それから僅に二十分ばかりでも経つて、不意に薩万へ捕方が踏込んで、天井裏から縁の下迄捜査したがおりせは眉一つ動かさなかつた。(以下省略)

史料2 「坂本龍馬の系譜」土居晴夫著(新人物往来社)P132を抜粋
「反魂香」(明治32年6月12巻4号)
安岡重雄(海援隊士安岡金馬の子)著

「一日も早く京都へ行きたく、此事を菅野(菅野)等に相談して用意を調べ、明治元年五月二十日、夕顔丸といふ船に乗込むで、直行、大阪へ着し、薩摩屋おりせ方へ泊込みました。...

白峰(駿馬)がきて一先づ土佐へ帰れと云ふ、お良は如何しても京都へゆくといふ。いろいろごたごたがありました、結局墓参りだけして国へ帰る事に決し...(以下省略)

史料3 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P630を抜粋
「岡内俊太郎より佐々木高行あて」
(慶応三年十月十四日 保古飛呂比巻十九)

(前文省略)夫より大坂に著し、上陸して、野本定吉殿は直に京都に出る事にて、私、龍馬、作太郎等は薩邸の前に薩摩屋といふ一小家ありて、此家に行き、高松太郎、白峰駿馬、管(菅)野覚兵衛、長谷部卓爾等居合せ居り、将来の事を戒め含め置き、大坂を發して京都に登り、龍馬は作太郎と共に木屋町に宿し、戸田は知人の宅へ参り、私は薩邸内に止り申候。

史料4 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P646を抜粋
「高松太郎より坂本権兵衛、乙女、春猪あて」
(慶応四年一月二十三日 京都国立博物館蔵、坂本龍馬関係文書第二)

[解説]

小笠(野)淳輔は龍馬の甥高松太郎で、龍馬遭難のときは、大坂「薩万」に他の海援隊士と居た。

史料5 「坂本龍馬の系譜」土居晴夫著(新人物往来社)P192を抜粋

慶応三年四月、後藤象二郎らの配慮により、「オーナー」が薩摩藩から土佐藩に変わり、社中は新たに土佐海援隊を編成した。隊士の数も増え、大坂・兵庫にも駐在員を派遣した。
大坂の詰め所は、土佐堀の薩摩藩蔵屋敷門前の人足差入屋薩万こと薩摩屋万兵衛方に置いた。
かつて勝海舟の神戸塾が閉鎖になったとき、伊達小次郎はここに匿われた。太郎(高松太郎)はここを拠点に商活動に専念した。

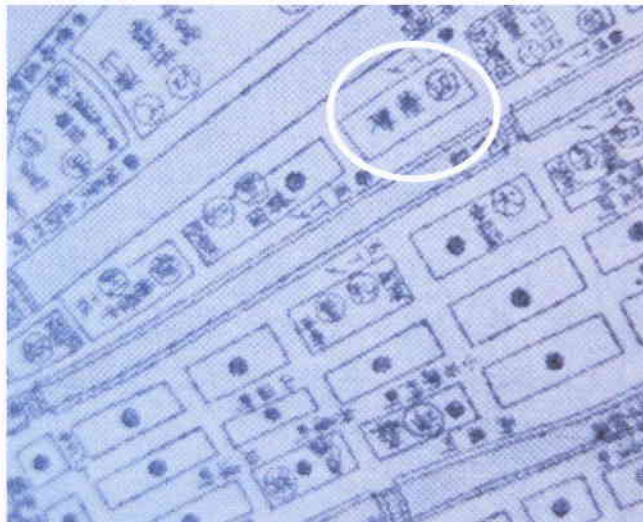
以上のように、「薩万」は薩摩藩の屋敷前に隣接または向かいにあった確率が高いと思われます。しかし、古地図では各藩の蔵屋敷など大きな屋敷しか示されておらず、商家は省略されています。

この時代の水帳が保存されていれば、勝海舟寓居であった専稱寺と同様に、確認が取れるのですが、大阪市中央図書館によると現存していないとの事でした。上記史料の文中で、「土佐堀」「大川」「裏が川」という言葉が確認されていますので、土佐堀のあった、薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)【当時:土佐堀2丁目、現在:大阪市西区土佐堀2-3】の周囲】であった可能性が高いと思っています。

しかしながら、薩摩藩邸は次にご紹介するように、上屋敷、中屋敷、下屋敷と3箇所ありましたので、中屋敷及び下屋敷の周辺の可能性も捨て切れません。

7 薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)跡 西区土佐堀2丁目3(三井倉庫南東角)

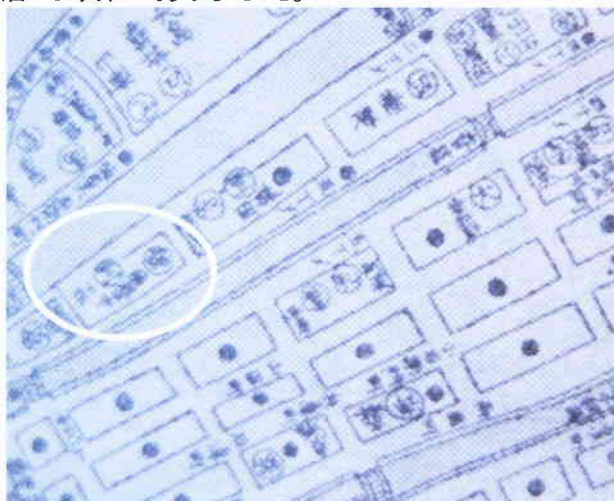
- ▶ 薩摩藩の蔵屋敷は上屋敷・中屋敷・下屋敷とありました。そのうちの上屋敷は土佐堀2丁目にあり、土佐堀通り沿いにある三井倉庫のある辺りにありました。南東隅に「薩摩藩蔵屋敷跡」と書いた石碑が建っています。蔵屋敷には藩から派遣された留守居役の武士以外に貨物出入りの事務を担当した「蔵元」と金融をつかさどる「掛屋」などがいました。鳥羽伏見の戦いが京都で開戦された頃、慶応4年(1868)1月4日未明、自らの手でこの蔵屋敷を全焼させています。



8 薩摩藩蔵屋敷(中屋敷)

西区江戸堀3-6-49(土佐堀2交差点)

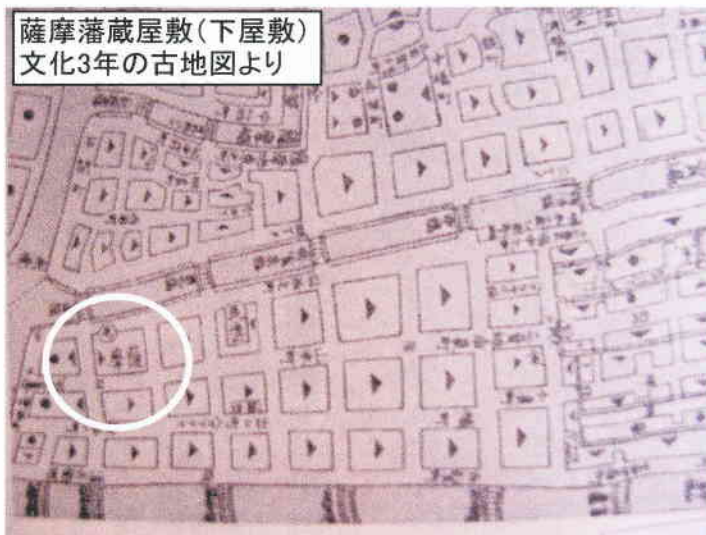
- ▶ 薩摩藩の中屋敷は、江戸堀5丁目(現在は江戸堀3丁目)にありました。平成11年(1999)3月に薩摩藩中屋敷跡の石碑が日産建設株式会社によって建立されました。



9 薩摩藩蔵屋敷(下屋敷)跡

西区新町4-12

- ▶ 下屋敷は、西区立売堀西の町(現在は西区立売堀5丁目)にあり、日生病院より南に100mほど行ったあたりに該当し、残念ながら石碑はありません。以前、立売堀川が東西に流れており、その川に架かる高橋の南詰にあり、古地図でも確認できます。



■坂本龍馬と薩摩藩邸

司馬遼太郎著の「竜馬がゆく 第6巻」(文春文庫)のP195より抜粋します。

『やがて土佐堀川に入り、二丁目の薩摩屋敷の裏で船を捨てた。薩摩藩邸では、すでに西郷からの指令がきいていて、竜馬の到着を待っていた。『よくまあごぶじでしたな』と、薩摩藩大坂留守居役木場伝内が言った。』

司馬遼太郎著の「竜馬がゆく 第5巻」(文春文庫)のP370より抜粋します。

なにしろ薩摩藩は大藩である。土佐の大坂藩邸は西長堀と住吉陣營の二つだけだが、薩摩は、竜馬が止宿している土佐堀二丁目だけでなく、江戸堀五丁目と立売堀高橋南詰東側にある。西郷はそのいずれかに泊まっているのだろう。(なかなか、商売熱心な藩だ)西郷のことではない。薩摩藩のことである。屋敷の数の多さを思いうかべて、ふと薩摩藩というものを竜馬は思ったのである。(途中省略)諸藩はたいてい一つである。(途中省略)(そういう藩が天下をとる)竜馬はそう見ている。金があり、かつ経済を知っている。(以下省略)

司馬遼太郎旧居跡 小説「竜馬がゆく」執筆の地

西区北堀江4-2-40(西長堀団地)

- ▶ 昭和32年(1957)、旧日本住宅公団(現住宅都市整備公団)が建設した西長堀アパートは、通称「マンモスアパート」とよばれ、現在の「億ション」と同様な価値で、大阪市民の注目を浴びました。
このアパートは、東京の晴海アパートと対をなす都心部高層賃貸住宅の最初の試みで建てられたそうです。
当初の入居者には著名人が多く、作家の司馬遼太郎もそのうちの一人でした。
司馬遼太郎の代表作「竜馬がゆく」は、土佐稲荷神社に隣接し、土佐藩蔵屋敷跡でもあるこのアパートに入居している時期に執筆されています。

司馬遼太郎著『竜馬がゆく』

『竜馬がゆく』は、「産経新聞」夕刊に昭和37年(1962)6月21日から昭和41年(1966)5月19日まで連載され、昭和38年(1963)から昭和41年(1966)にかけて文藝春秋から刊行されました。

坂本龍馬を主人公とし、世間一般でイメージされる龍馬像はこの作品によって作られたと言ってもいいと思います。

小説の中では「竜馬」と表記され、「龍」でないのは司馬さん自身がフィクションとしての彼を描いたためとも言われています。

この「竜馬がゆく」の小説によって影響を受け、勇気や希望をを与えられた人は数多くいらっしゃると思います。私もそのうちの一人です。



西長堀団地



西長堀団地と南に隣接する地にある岩崎家舊屋敷跡碑

11 西長堀川と鯉座の跡

西区北堀江4

- ▶ 寛永2年(1625)に開削された長堀川は、東横堀川から分流して西に流れ木津川に注いでいました。
長さ約2,441m、幅は上流で約45.3m、下流で44.3mあり、西横堀川以西が「西長堀」と呼ばれていました。
昭和45年(1970)に埋め立てられましたが、西横堀川以西の西区地域には、東から吉野屋橋・西長堀橋・宇和島橋・西大橋・富田屋橋・上白髪橋(後の問屋橋)・下白髪橋(後の白髪橋)・鯉座橋・新鯉座橋・新玉造橋(後の玉造橋)・長堀高橋(後の高橋)・洲崎橋などが架けられていました。
土佐藩の蔵屋敷は、鯉座橋とその西約144.8mの玉造橋の中間、西長堀川両岸一帯を占めていました。
鯉座橋はそのため土佐橋・土佐殿橋とも呼ばれましたが、もともと右岸に鯉座があったため、鯉座橋と名づけられました。
司馬遼太郎の小説「竜馬がゆく」では、たびたび鯉座橋の名が出てきます。

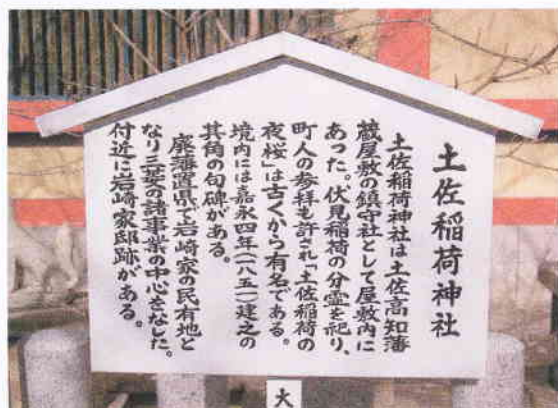


鯉座発祥の地碑

12 土佐藩蔵屋敷跡(土佐稻荷神社)

西区北堀江4-9

- 桜の名所として親しまれている土佐稻荷神社、隣接するマンション、及びこども文化センターなど、この周辺は土佐藩の大坂蔵屋敷がありました。そのうちのひとつに当時はマンモスアパートと呼ばれたマンションに作家の司馬遼太郎氏が住んでおられました。幕末の土佐藩は、第15代藩主 山内豊信(のちの容堂)が人事の刷新を図り、吉田東洋を藩の重職に抜擢し、藩政改革を行いました。一方、幕政では將軍継嗣問題に関し、山内豊信は一橋慶喜の擁立に尽力しました。結果は、大老 井伊直弼の推す紀州藩主 徳川慶福(のちの家茂)が將軍職に就くことになり、井伊派により一橋派が退けられることとなります。山内豊信は隠居謹慎の処分を受けます。この頃から山内容堂と名乗ります。そのような慌ただしい中、井伊直弼が暗殺され、また土佐藩内でも吉田東洋が暗殺されます。吉田東洋暗殺後、「土佐勤王党」を率いる武市半平太を中心とした勤王派が勢力を得ます。「文久3年8月18日の政変」後、情勢が変わり、山内容堂は勤王派を弾圧し、武市半平太ら勤王派の命を奪いました。再度情勢が変わり、土佐脱藩の坂本龍馬と参政 後藤象二郎との会談で意気投合し、「亀山社中」は土佐藩支配下の「土佐海援隊」となります。坂本龍馬が、大政奉還などの内容を盛り込んで起草した「船中八策」が、後藤象二郎により山内容堂へ伝えられました。この案が土佐藩の藩論として採用し、正式に建白書として認め、第15代將軍徳川慶喜に提出しました。それが機となり、「大政奉還」が成立しました。平和的な解決が成立しかけたのですが、「王政復古の大号令」による武力討幕派によって徳川慶喜は政権の座から退けられ、土佐藩はやむなく討幕軍に参加していくこととなります。



今回は坂本龍馬に関連した大坂史跡をご紹介いたしました。次回もご期待ください。